

特集

問

い直そう、保育の中のアたりまえのこと11

「感性の豊かさを育てる」とは？



インタビュー

わくようぞう
和久洋三氏

童具館館長、童具開発研究所 WAKU 所長、「和久洋三のわくわく創造アトリエ」主宰。『遊びの創造共育法（全7巻）』『子どもの目が輝くとき』（ともに玉川大学出版部）ほか著書多数。

「上手じゃないから絵かくのきらい」という子どもがいます。絵や歌などの表現を「うまい」「下手」で評価する、親や保育者たちの視線にさらされているからでしょう。保育内容「表現」領域では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ことが目的とされています。「豊かな感性を育てる」とはどういうことなのか、長年子どもの創造活動を見守り育ててこられた和久先生にインタビューしました。「考える」コーナーには、幼稚園から榎谷先生、保育者養成の現場から平田先生、自らダンサーでも研究者でもある中野さんが、ご寄稿くださいました。

聞き手 浜口順子（本誌編集委員）

和久先生の幼少のころ

浜口 子どものころ先生はやっぱり感性豊かな少年だったのでしょうか。

和久 かもしれないな。遊ぶのが好きで、好奇心旺盛だね。小学校一年の時から、絵を習いに行っていたんですよ。友達が行っていると聞いて見に行ったら、面白そうなので、僕もやりたくなった。それでおふくろが多分通わせてくれたと思うんです。でもね、クリエイトするのは何も絵とか物づくりだけじゃなくて、楽しく遊びをつくり出す、それもクリエイトだからね。これは人後に落ちなかったですね。小学校、中学校、高校、ずっとなんだけど、勉強はできないけど遊ぶ時は必ずリーダーになっていった。今でも、次から次に発想はわきます。創造力っていうのは衰えないね。

浜口 それはやっぱり、見守ってくれる大人が先生のそばにいらしたっていうことでしょうか。

和久 というかね、見守られなかったからじゃない

かな。

浜口 へえー、そうですか。

和久 うん、好き勝手にさせてくれていた。僕は兄弟四人なんだけど、兄貴たち二人はものすごく勉強できたんですよ。僕と下の兄貴の間に一人、姉がいたんだけどね、彼女が小学校一年の時に、僕が三歳の時だけどね、亡くなっちゃったの。それで親父は明治の男だったからすごく厳しい人だったんだけど、姉が亡くなったことによつてね、多分、命より大事なものは無いっていうのかなあ、そんな感覚が親父の中に出てきて、うるさく言わなくなったんじゃないかな。だから、僕だけはものすごく自由に育ったんですよ。怖かったことは怖かったけどね。

浜口 お兄さんともよく一緒に遊んだのですか？

和久 下の兄貴は、東大行ったんだけどね、僕が幼稚園から小学校の低学年の時まで、よく本を読んできました。

浜口 いくつ年が離れていらっしやるんですか？

和久 六つ。間が三、三、三だったのよ。それで姉

が亡くなったから六つ。兄貴はサトウハチローの詩が好きでね。童謡を自分でも書いて。本当に、今になってみるとすごく兄貴の影響を受けているんだなっていうのを感じます。おふくろはもう、ただただ優しいおふくろだったから、叱られたっていう記憶がないくらい。

浜口 東京の町中でお育ちになって、自由に遊んで、けがも多かつたんじゃありませんか？

和久 けがは多かったですね。でもやっぱりね、あの「遊び込んだ」っていうのが今全部生きているんだよね。いろんなことに好奇心を持って、そして友達が好きだったから、友達を巻き込んだり何かやっていたからね。今、若い人を見るとね、遊び足りねえなーって、やっぱり思うね。もっと遊べよお前たちってね。

浜口 先生ご自身は幼稚園に行かれたのですか？

和久 幼稚園にね、泣き虫で行けなかったんですよ。おふくろが、入園して一週間であきらめたって言うてましたね。保育室に入って、最初は親たちが窓か

ら見ているんですよ。それで一人二人といなくなるんです。そうすると僕は「おふくろがいなくなつたぞ、わあああーっ」と出ていっちゃう。(笑)

保育園で働いたこと

浜口 保育園で一時、働いていらしたんですね。

和久 うん。働いていたっていうほどでもないんだけどね。大学出てね、フレールベル館で二年間働いたんですよ。それでどうしても子どもの現場に入りたいたい始めたの。

浜口 東京都内の保育園で？

和久 ううん、浦和(埼玉県)の保育園。実はね、僕は大学院の時に美術大学の予備校で教えていてね。その教え子のお父さんが保育園をつくるっていうので、それで僕に白羽の矢が立ったんだけど、僕は、園長をやったら夢中になって、デザイナーの道を断つことになるからそれはできないって言うて。でも、保父さんにはなりたいたいと思っていたから、ならせてくださいって。それで金のために予備校に週二日指



▲和久洋三氏

導に行つて、保育園にも二日行つて、残つた時間で
フレーベル館の仕事させてもらつて。二年ばかり
そういう生活をしていました。
浜口 保育園では、たくさん子どもと遊びまわつた
んですか？

和久 僕は造形活動を指導するという役割でね。た
だもう今考えると申し訳ないというかね、恥ずかし
いようなことしかしてなかつたんだけど。子どもに
こつちが学ばせてもらうにしても、学ぶだけの下地
もまだないんです。そこで、一年間、子どもが何で
遊んでいるかというデータをとつてみたんですよ。
そしたらね、一番遊んだのがね、外ではボール、部
屋の中では積み木だったんです。僕はもつといろん

な形のいろんな面白いものを
作ろうと思つて、勇んでいた
わけですよ。そしたら、丸と
三角と四角でさ、子どもは遊
んじやうの。まずいな、これ
じゃデザイナーいらさないじゃ

ないかつてね。

でも、それがよかつたですね。その丸と三角と四
角で遊ぶ意味を問いつつて、その後二十年ぐらいた
つてね、フレーベルとの出会いつつていうか、それ
によつて理解していくんだけれども。あの時に子ども
とかかわつて、そういうデータをとらなかつたら、
自分勝手なことばかりやつていたでしょうね。

もう一つ、ミーちゃんという女の子（四歳）が
いてね。登園すると「ちえんちえん」つて飛びついで
くるの。かわいい子でね。それが、ある日いなくて
ね、どうしたんだろうなと思つたら、園庭の片隅で
ポツンと立つてるの。そばに行つて、「ミーちゃん、
おはよう。どうしたんだ？」と言つたらね、ふつと
目線を下げるの。目線を追つてみたら、新品の真つ
赤な運動靴履いているんですよ。「おっ！ ミーちゃん、
新品の靴じゃないか、いいなあ」つて言つたら、
カーディガンをこうヒラヒラさせるの。おそろいの
赤いカーディガン。「おっ！ おそろいじゃないか、
似合うぞ、かわいいぞ」つて言つたらね、初めてに

こつと笑つてね、「これ昨日お母ちゃんに買つてもらつたの。靴は、お父ちゃんに買つてもらつたんだよ」と、ぼつつと言うんですよ。お父さんが何か月前に交通事故で亡くなつてね、多分その亡くなる直前ぐらいに、お父さんがミーちゃんのために買つてくれた靴だったんだね。それがちょうど履けるようになって、お母さんがミーちゃんにその靴を履かせるのにおそろいのカーディガンを買つて着せてきた。

その日から彼女が変わつてね、運動靴をきちつとそろえて部屋に入るようになったの。それまではね、ポーンと投げ入れるような子だったのがね。それ見てね、物つてこういうものなんだつていうのに気が付いたんですよ。それは、もういないお父さんが最後に買つてくれた靴、そういう思いが込もつたものなんだよね、ミーちゃんには。物を感じるんじゃないかね、人の心を感じるんですよ、物を通して。きつと、お母さんの思い、お父さんの思いを、靴を通して感じていたんだと思うんです。

これからおもちゃを作る時、ただ形を追っていく

だけじゃだめだな、つて思つたの。子どもが何を感
じ、何を考え、お母さんたちに何をメッセージする
か、保育者に何をメッセージすればいいか、という
ことを、きちつとこつちが持つていないと、非常に
身勝手な独りよがりのものを作つて与えることにな
るなと思つたんです。それからね、勉強し始めまし
た。心理学の本とか、フレーベルとか、いろんな教
育学の本を読むようになったの。それはやつぱり、
ミーちゃんに出会つたことが大きいんですよ。

感覚と感性

浜口 表現をする上で、いろいろなものに触れる機
会はやはり大切なのでしょうか。

和久 一番核にあるのは、豊かな生活体験ですよ。自然とふれ合うとか、お母さんとふれ合う、友達とふれ合う、そういう人間として心が通じ合うという世界、これがベースにあつて、子どもにとつてのおもちゃはそれを表現していくツールなんです。そして、その表現をする時に、実はおもちゃにも物事

の中にも秩序が見え隠れするんですが、秩序を発見することによって創造的な世界が広がっていくんだということを知っていく。

浜口 その秩序を悟っていくところが、感覚ではなくて、感性でしょうか。

和久 そこが一番難しいところだね。秩序を理解するっていうのは知性ですよ。だけど、知性と呼び起こすのは感性なんです。例えば、感動するとかさ、素晴らしい！ っていう驚きとかね。そういうものはやっぱり感性の世界ですよ。それがあるからこそ知性が働きますんであって、ただ知性だけを育てようとして感性をネグレクトしたら、多分人間って育たないと思いますね。

浜口 感覚と感性の関係はどういうものですか？

和久 感性と感覚の違いは、例えば、ものを食べるでしょ。甘い、辛い、苦い、しょっぱい、これ感覚でとらえるものですよ。

浜口 動物的なものなんですかね。

和久 そう、そのまま即物的なね。ところがそれ

を、おいしいとか、まずいとかっていうのが感性ですよ。つまりそこに調和を感じ取るか、感じ取らないか、それが感性だと僕は解釈してるの。

浜口 先生の考案された童具は、遊んでいると、ピタッと合うとか、すつきりするとか、そういう気持ちよさを感じます。これは調和でしょうか。

和久 感覚と感性もね、切っても切れない関係にあると思うんですよ。ピタッといったというのは感覚的なものだよ。でも、気持ちいい！ っていう時はもう感性ですよ。きれいだとか、心地いいとかね、そういうのはみんな感性ですよ。

僕は、あらゆる物事のキーワードは関係性だと思ってるんです。すべて人間が感じたり考えたりするのは、関係性を見つけ出す、関係性を読み取る、関係性をつくり出す、ということだと思ってるんです。その関係性の究極は何かという、一致。ピタッと合う。



だから子どもって一〜二歳から「同じ」ということをすごく喜ぶんです。ピタッと合うのが大好きなの。一歳になるかならないかのころから、型合わせをピタピタッとやったりね、ビーズをずっとピンに挿していったりするんですよ。二歳になると「おんなじ、おんなじ」と言って喜ぶ。一致の快感っていうのが、どうも人間の究極の願いなんだね。簡単に言うると、生命って、雄と雌とが一致しなきゃ生まれませんですよ。だからね、例えばこうやって二人で話している、「僕、今こういうことやろうと思ってるんだけど」「あら、私もそれ興味あったの」「よし、一緒にやろう！」と一致するから広がるんですよ。実は僕が若いころは、二つ三つのものが一致するということは可能性が少なくなるって感じていたの。だからいろんな意見があったほうがいいんだ、ってね。もちろんいろんな意見があったほうがいいんだけどね。だけど、何かが生まれる時は一致しないと生まれませんよ。いや、私はそれ興味ない」「僕も興味ない」じゃあ何も生まれないわけじゃない

い。そこで、「あつ、それ面白いからやろうよ」って言った時に、一致した時に、何かが膨らんでいく。生命もそうでしょ。創造活動もそうなんですよね。関係性を探し出していく、つくり出していく作業なんですよ、すべて人間のしていることは。

大人になっても感性を育てられるか

浜口 大人になっても感性は育つのでしょうか。

和久 感性を育てるにはどうしたらいいかっていうとね、いいものに出合うしかないんです。簡単に言うとな、おいしいものを食べなきゃおいしいものってわからないですよ。おいしいものがわかるとまづいものがわかるようになるんです。だから、感性を豊かにするには、いいものに出合うしかない。

浜口 いろんな所に出かけて行って……。

和久 そう、いろんないいものに出合う。そうすると、つまらないものがわかってくるんですね。それがどんどん豊かになってくるとね、藤島武二の絵じゃないけど、例えばパリの汚れ切った壁と古いバラ

ツクみたいな家だつて、描くと絵になっちゃうわけですよ。あれをなぜ彼は絵にするか。きれいだから、美しいからですよ。つまり、いろんなところに美しさを見つけ出せるようになるんです、感性が豊かになるということ。

浜口 大人はよく本物みたいに描けている絵に「うまい」と感心します。その眼で見ると、子どもの作るものは、つまらなく見えてしまう。

和久 僕もね、実は、芸大を出ているからちゃんと作品の本質を見抜けると思われていたようだけど、本当に本質が見られるようになったのは、五十五歳過ぎからですよ。それまではね、学んできているから、

いろんな価値観が頭に入っているんです。その与えられた価値観でものを見ちゃうんです。自分の素直な気持ちで無心にもものを見るんじゃないかと、例えば、ピカソの絵はこういう時代背景があつてこういう歴史があつて、それでこういうものが生まれてきたんだとかね。そんなことも価値基準になっちゃう。

浜口 知識が邪魔をするんですか。

和久 頭でいろんなことを考えちゃうんですよ。それを捨てさせてくれたのは子どもの絵ですね。子どもはね、そんなこと何もないんだから。そのまんま心にあるものが表出されるわけですから。それでピカソの絵と比べて遜色ないんだからね。ピカソが「や」と子どものように絵が描けるようになった」と言つたのは九十歳を過ぎてからです。

三歳、四歳の子が、すごいのを教えないのに描くわけですよ。僕は何も指導しませんから。僕の教育法は指導しない教育法だからね。

指導しない指導

和久 なぜ指導しないかというとな、集中力を途切れさせたくないんです。子どもは何かを本気でやる時には、絶対自分で答え探しをしているんですよ。その答え探しをしている時に、大人というのは安易に「こうしたら、ああしたら」と自分勝手な答えを与えちゃう。でも、それは自分で見つけ出した答えじゃないの。だから、子どもに見つけさせてやりた

い。子どもはね、試行錯誤しますよ、子どもが絵を描いているのを見て、「ああっ、素晴らしい絵だったのにあんなになっちゃった、ううう」なんてがっかりしていると、またちゃんと感動する絵に戻っていったりね。「おおっ、やっぱりなー」。納得させてくれます。

浜口 「褒めの子育て」と称して、「すごい」とか声掛けしよう、なんていう風潮もあります。

和久 それはいいんですよ。ただあまり具体的に褒めちゃいけないの。例えばね、目を緑色に描いた。「おお、緑色の目、面白いね」と言うでしょ、そうすると次から必ず緑色の目になる。(笑)

浜口 そうか。あまり具体的なのはいけない。

和久 そう。「こういうの先生好き。いいねー大好き」って、これでいいんです。抽象的に褒めたほうがいいんですよ。

浜口 「本物みたい」とかはよくないですか。

和久 本物みたいというのは、似ているっていうだけのことだから。似せる必要なんか何にもない。子

どもたちが絵を描くたびに、僕がかなわないと思う絵に必ず出合います。ああ、いいなー、こんなふうを描きたいなーと思う作品に。アトリエ^注に来た初めての子どもにもですよ。つまり、子どもはもう潜在的に調和や美を読み取る力を持っているんです。

大人がまず変わらなきゃ、子どもがかわいそう。僕も若い時はね、何もわからなかつたんです。でもこうやってアトリエ持つて、日常的に子どもとつき合ってみると、ぶわーってやつと見えてきた。五十歳ぐらいになつてからだね、見えてきたのは。今七十歳だからね。つまり大人ってね、子どもをバカにしているんだよ。この程度のものだって、思い込んでいるのね。それを、何とかしなきゃいけないのが、これからの僕のやるべきこと、使命なの。

(二〇一三年四月二十二日)

注

和久先生が運営する童具館の

「わくわく創造アトリエ」のこと。

